

Sophia

ソフィアだより

2025年

冬

No. 8



温故知新
関所と佐渡金荷
—ある奉行の日記—
おはなしのドロップ
星の王子さま

特集

ふるさと柏崎を再認識

なつかし体験 i n 別俣

柏崎市立図書館



なつかし体験in

別侯

10月12日（土）に、農村体験交流施設 田舎の学校きららで、小学生の親子を対象に読書となつかし体験を組み合わせたイベント「なつかし体験in別侯」を行いました。旧別侯小学校の木造校舎で、昔なつかしい生活や遊びに挑戦したり、本に触れたりして、親子で地域の方と図書館職員と交流しながら特別な経験を味わいました。地域の魅力と読書の楽しさを感じた1日となりました。

9:00
ぬか釜炊き
見学



校舎で授業をする前に、ぬか釜炊き見学をしました。ぬか釜とは、稲のもみ殻を燃料として炊飯をする道具です。今回は、黒姫山から出てくる一番水で育てた別侯産の新米コシヒカリを炊きました。ぬか釜の温度は、最高で1000度にも達するため、たった20分でふっくらとしたお米が炊きあがりました。



始業のベルと同時に全員着席!!
社会、国語、家庭科の授業をしました。

10:00
授業



社会の授業では、別侯農村工房代表の池嶋さんを先生に、別侯地区について学びました。

別侯は、黒姫山の麓にある細越、久米、水上の3集落からなる地区の総称です。美しい山々に囲まれた田園風景が広がる盆地で、降雪が多い地域のため、昔は冬の農閑期に男衆が酒蔵に杜氏として出稼ぎに行ったそうです。どこか懐かしさを感じさせる別侯地区の魅力をたっぷり教えてもらいました。



読んだのは
この3冊!



「もりのかくれんぼう」
末吉 暁子/作、
林 明子/絵
偕成社 (E9 ハヤ)



「びっくりまつぼっくり」
多田 多恵子/ぶん、
堀川 理万子/え
福音館書店 (E9 ホリ)



「おにぎりをつくる」
高山 なおみ/文、
長野 陽一/写真
ブロンズ新社 (E5 ナカ)



国語の授業は、ソフィアセンターの司書による読み聞かせです。秋にぴったりのおはなしや自然のくらしにまつわる絵本に親子でじっくり耳を傾けました。

読み聞かせの後は、自由読みタイム! 読み聞かせの本を家族で読んだり、昔の遊びに関する本を見て想像を膨らませたりして、思い思いの方法で本と触れ合いました。ノスタルジックな校舎内で、秋の気配を感じながらの読書体験は特別なものでした。

12:00
給食



家庭科では、ぬか釜で炊いたお米でおにぎりづくりを体験しました。ごはんを握ってまあるくしたら、自家製味噌やゴマをトッピング。ぎゅっと力を込めたり、ふわっと優しく手のひらで包んだり、握り方に变化をつけて食感の違いを楽しめるよう工夫しました。

お待ちかねの給食の時間です。地域の方が作ってくれた豚汁や野菜の天ぷら、季節の菜っ葉を酒粕で和えた地域の郷土料理「いり菜（えり菜）」もふるまわれました。



この日は特別に、地域おこし協力隊の酒井さんが、別侯産の小麦を石臼でひいて作ったパンをくださいました。酒井さんの作るパンの味は格別で、多くのファンが市内外から買いに来るそうです。



13:00
竹とんぼ
作り



14:30



大空へ
舞い上がれ!

おいしい給食を食べた後は、「竹とんぼ」作りに挑戦! 本物の竹を小刀で削って作ります。左右を均等に削ることがコツで、バランス良く削ると高くまで飛ばすことができるそうです。親子で協力しながら竹を削りました。

完成したら、校庭で竹とんぼ飛ばし! 大人も子どもも夢中で飛ばしていました。





鉢崎(米山町)は古くから米山峠の要衝として重視され、戦国時代から関所がありました。

近世に入ると鉢崎関所は江戸幕府が設置した五十三の関所の一つとなり、鉢崎は宿場町と

して栄えます。松尾芭蕉が柏崎で宿泊を断られ、そのまま鉢崎まで歩いてきて宿泊したとか、伊能忠敬の測量器具を鉢崎関所の役人が改めようとして揉め事になった、などというエピソードもあります。また鉢崎宿は、佐渡で産出され江戸に運ばれる金銀(御金荷(おかねに))が泊まる地でもありました。出雲崎に荷揚げされた御金荷は、石地、椎谷、宮川、柏崎、鯨波の各宿場を経て、鉢崎の御金蔵で一泊するのが慣例でした。

この鉢崎関所と御金荷について記された図書「関所と佐渡金荷 ーある奉行の日記ー」が、柏崎刈羽郷土史研究会から先ごろ刊行されました。これは、鉢崎関所を統括する立場である高田藩士の勤務日記であり、関所役人の業務が事細やかに記されています。今回刊行された図書は、原文の翻刻(くずし字を活字化したもの)だけではなく、読み下し(日本語として読みやすくした文)が記載されているのが大きな特徴です。見開きページに、原文・翻刻・読み下しが並べられ、それぞれを比較しながら読み進めることができます。

例えば、右記の原文に対して、

【翻刻】右者佐州より江戸上納金銀、自分致宰領、明後十五日出雲崎出立、江戸表江罷通候間、道中宿々無滞継送可有之候

【読み下し】右は佐州より江戸上納金銀、自分辛領致し、明後十五日出雲崎出立、江戸表へ罷り通り候間、道中宿々滞りなく継送りこれ有るべく候

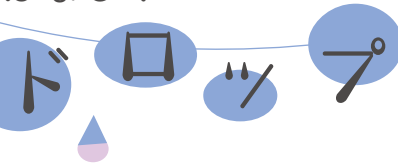
とわかりやすく記されています。そのほかにも、難しい用語にはふりがなや解説が加えられるなど、「古文書を学習している人に役立つものにしたい」という著者の思いが込められた図書となっています。当館でも閲覧・貸し出しが可能ですので、ぜひご利用ください。

●参考資料

『関所と佐渡金荷 ーある奉行の日記ー』新沢佳大／編著
『図説・新潟県の街道』刊行会／編(200 キヨ)
『柏崎刈羽 第5、6、35号』
柏崎刈羽郷土史研究会／発行(224 Kカリ)
『米山町あれやこれや』石黒敏男／著(224 イン)
『柏崎編年史 上巻』新沢佳大／編著(224 シン)
『柏崎のいしづみ』山田良平／著(224 ヤマ)
『柿崎町史』(昭和13年発行)柿崎町史編集会／編(232 カキ)
『北国街道II(新潟県歴史の道調査報告書 第5集)』(290 Nキヨ 5)

右者佐州より江戸上納金銀、自分致宰領、明後十五日出雲崎出立、江戸表へ罷り通り候間、道中宿々無滞継送可有之候

おはなしの



『星の王子さま』

サン＝テグジュペリ／作 内藤 濯／訳
岩波書店(953 サン)

科学の発展により、人類が長年抱いてきた疑問の多くが明らかになった現代においても、宇宙は依然として多くの謎に包まれています。そんな未知の世界から地球に降り立った小さな王子さまと僕の友情の物語です。

王子さまは小惑星B612から地球にやって来ました。道すがら、いくつかの星々に立ち寄りますが、王子さまの価値観とは相容れない、不思議な生き方をしている人たちばかりと出会い、孤独を深めてしまいます。そんな中、偶然たどり着いた星・地球で初めて心を通わせることのできる僕と出会ったのです。



王子さまと僕の人生観に共通しているのは、「いちばん大切なものは目に見えない」ということ。そして、多くの人間はこの真理を忘れてしまっていると感じています。現代社会を生きる私たちは、損得や効率を物事の判断基準として最優先させてしまいがちです。常に頭で考える癖がついてしまっている私たちにとって、心の目を見た感覚を信じることはとても難しくなっています。

この物語の著者サン＝テグジュペリは、フランス軍のパイロットとして第二次大戦に参戦、亡命先のアメリカにて『星の王子さま』を執筆しました。生きるとはどういうことかという人間にとって根源的な問いについて考えさせられる作品です。

